杜若

内九ノ三

杜若

概説

内九巻ノ三

諸國一見の僧、三河國八つ橋といへる所に到りけるに、杜若の今を盛りと咲きゐたれば暫しながめゐたりしに、杜若の精一人の女性となりて現れ来り、昔業平が東の國に下らんとて此所を過ぎ、かきつばたといへる五文字を句の上に置きて歌を詠みたりしこと、又其業平は極樂の歌舞の菩薩の化身なることなとを語りて彼の僧を己が庵に伴ひ歸り、二條の后の召されたる唐衣を著、業平の冠りし透額の冠を著けて歌舞をなし、其身は草木ながら遂に佛果を得しことを喜びて消え失せけり、

此曲ハ閑カニ粘ラヌ様ニ謡フヲ宜シトス

小書　戀之舞　素囃子　彩色傳　伊勢傳

役別	装束附
ワキ　旅僧	角帽子　着附無地熨斗目　又小格子ニモ　水衣　腰帯　扇　珠数
シテ　杜若ノ精	面若女　鬘　鬘帯　着附摺箔　色入縫箔腰巻　唐織着流　物着ニ唐織ヲ脱ギ　冠（懸纓緌）　紫長絹　縫箔腰帯　葛扇持

季	四月	曲柄	三番目（葛物）
所	三河國碧海郡八橋	稽古順	一級

杜若（カキツバタ）

世阿彌元清作

ワキ僧詞　これは諸國一見の僧にて候。われこの間は都に候ひて。洛陽の名所舊跡殘りなく一見仕りて候。又これより東國行脚と志し候。

道行　上歌　夕べ夕べの假枕。夕べ夕べの假枕。宿はあまたに變れども。同じ憂き寝の美濃尾張。三河の

國に着きにけり三河の國に着き
にけり、、(コトヽ)急ぎ候(気ヲカヘ)程に三河の
國に着きて候(気ヲカヘ)又これなる澤邊(サハベ)に
杜若(カキツバタ)の今を盛(サカリ)と見えて候立ち
寄(ヨ)り眺(ナガ)めばやと思ひ候(拍子ニ合ハズ カヽル上 朗カニ)げにや光陰
とゞまらず春過ぎ夏も来て草
木心なしとは申せども時を忘れぬ

花の色かほよ花とも申すやらん。
あら美しの杜若やな

シテ女 呼掛 なうなう御僧何しにその沢には
休らひ給ひ候ぞ ワキ これは諸国一見
の者にて候が杜若の面白さに眺め
居て候さてここをばいづくと申し候ぞ

シテ これこそ三河の国八橋とて杜若の

名所(メイショ)とてはへぎすがまての杜若は。名に負(オ)ふ花の名所(ナドコロ)なれば色も一入(ヒトシホ)濃(コ)紫(ムラサキ)のなべての花のゆかりとも。思ひなずらへ給はずして。取りわき眺め給へかし。あら心なの旅人(リョジン)やな。

ワキ　げにげに三河の国八橋の杜若は。古歌にも詠(ヨマ)まれけるとなり。何(イヅ)れの

歌人(カジン)の言(コト)の葉(ハ)やらん取りたく
てろゝく以(シテ)閑(カニ)伊勢物(モノ)語(ガタリ)にいへくてを
ハ橋といひけるは水行く川の蜘(ク)蛛(モ)
手(デ)なれバ橋を八(ヤ)つ渡せるなりその
澤に杜若のいと面白く咲き乱れ
たるを或人杜若といふ五(イツ)文(モ)字(ジ)を
句の上(カミ)に置(オ)きて旅の心を詠(ヨ)めと

云ひければ。唐衣きつゝなれにしつましあれば。遥々来ぬる旅をしぞ思ふ。これ在原の業平の。その杜若を詠みし歌なり　あら面白やさてはこの東のはての国までも業平は下り給ひけるか　こと新しき問ひ事かな。この八橋のこゝのみか。

なほしも心の奥深き名所名所の道すがら

ワキ 国々所々多けれども取りわき心の末かけて

シテ 思ひわたりし八橋の

ワキ 三河の沢の杜若はるばるきぬる旅をしぞ

ワキ 思ひの色を世に残して

シテ 主は昔に業平なれども

ワキ 形見の花は

シテ 今ここに

○小謠　拍子二合

上歌 在原の跡な隔てそ杜若。あとな隔てそ杜若。沢邊の水の淺からず。契りし人も八橋の蜘蛛手に物ぞ思はるゝ今とても旅人に昔を語るけふの暮やがて馴れぬる。心かなやがて馴れぬる心かな。

シテ詞 いかに申すべき事の候

ワキカヽル 何事にて候ぞ

シテ「見苦しく候へども。わらはが庵にて一夜を御明し候へ

ワキ「あら嬉しや頓て参り候べし

物着

シテ「なうなうその冠唐衣御覧候へ

ワキ「ふしぎやな賤しき賤の臥処よりさもかかやく衣を着。透額の冠を着し。これ見よし承る。こはそも如何なる事にて候ぞ

シテ〽これぞこの歌に詠まれたる唐衣。高子の后の御衣にて候へ。又この冠は業平の。豊の明の五節の舞の。冠なれば。形見の冠唐衣。身に添へ持ちて候なり　ワキ〽冠唐衣は先づ先づ置き給。さてさて御身はいかなる人ぞ　シテ〽真は我は杜若の精なり。

植ゑ置きし昔の宿の杜若と。詠み
しも女の杜若よ。ありし謂の言
葉ありて業平は極楽の歌舞の
菩薩の化現なれば。詠み置く和歌
の言の葉までも。皆法身説法の
妙文なれば。草木までも露の恵
の佛果の縁を弔ふなり　「これは

末世の奇特かな。まさしき非情の
草木に。詞をかはす法の聲 シテ「佛
事をなすや業平の。昔男の舞
の姿 ワキ「これぞ即ち歌舞の菩薩
の シテ「假に衆生と業平の。ワキ「本地寂
光の都を出でゝ シテ「普く濟度
ワキ「利生の シテ「道に「遥々來ぬる唐

衣。遥ゞきぬる唐衣。着つゝや舞を
かなづらん。シテ上「別れこし。跡の怨みの
唐衣。地「袖を都に。返さばや。シテ上「そも
そもこの物語は。いかなる人の何
事によつて思ひの露の信夫山。忍
びて通ふ道芝の。始めもなく終りも
なし。シテ上「昔男初冠して奈良の京。

○サシ曲独吟
○切迄囃子

春日の里にしるよしして狩に往にけり。仁明天皇の御宇かとよ。いとも畏き勅を受けて。大内山の春霞たつや弥生の初めつ方春日の祭の勅使として透額の冠を許さるゝ君の恵の深き故。殿上にての元服の事。当時その例稀なる故よ。

〇仕舞

初冠と申すとかや。然れども世の中の一度は栄え。一度は衰ふる理の。真なりける身の行方。住み所求むとて。東の方に行く雲の。伊勢や尾張の海面に立つ波を見て。いとどしく過ぎにし方の恋しきに。羨ましくも。帰る波かなと

うち詠めゆけば信濃なる。浅間の
嶽なれや。くゆる煙の夕景色
シテ上「さてこそ信濃なる。浅間の嶽に
立つ煙。を遠人の。見やはとがめぬ。
と口すさみ。なほ遥々の旅衣。三
河の国に着きしかば。ここぞ名に
ある八橋の。沢辺に匂ふ杜若。花

紫のゆかりあれば妻しあるやと
思ひ出づる都人恋ぬるまでの物語
その品多き事ながら取りわきこの
八橋や三河の水の底ひなく契り
し人の数々に名をもかへ品をかへ
て人待つ女物病玉簾の光も乱
れて飛ぶ蛍の雲の上まで往ぬべく

秋風吹くと。假に現れ衆生済度
のわれぞと知るや否や人の
闇きに行かぬ有明の光普き月や
あらぬ。春や昔の春ならぬ我が身
一つはもとの身にして本覚真如の
身をわけ陰陽の神といはれしも。
たゞ業平の事ぞかしかやうに申

す物語後らせ給ふ旅人遥々き

ぬる唐衣。着つゝや舞をかなづらん。

シテ 中 太鼓声合 拍子三ツ合ハズ

花前に蝶舞ふ紛々たる雪 地 上 柳

上に鶯飛ぶ片々たるきん 序之舞

シテワカ上 ○独吟 ○植ゑ置きし。昔の宿のかきつばた

上地 太鼓頭ニ付 色ばかりこそ昔なりけれ。色ばか

りこそ昔なりけれ色ばかりこそ

シテ中　ノラズ　拍子ニ合ハズ　昔男の名をとめて。花たちばなの匂うつる。菖蒲の鬘の。色はいづれ。似たりや似たり杜若花菖蒲梢に鳴くは

○仕舞

シテ中　ノラズ　ツヨク　拍子ニ合ハズ　蝉のからころもの

上ゲ　袖白妙の卯の花の雪の夜も白々と。明くる東雲の浅紫の杜若の花も悟りの心開けてすはや今

てそ草木國土すゑや今こそ草木
國土悉皆成佛の御法をえて
てそ失せにけれ。

大正拾二年一月拾日印刷
同　年一月拾五日發行

（定價金參拾錢）

訂正著作者　廿四世　觀世元滋
京都市上京區二條通麸屋町東北角

發行兼印刷者　檜常之助
東京市神田區錦町二丁目拾番地

發行所　檜大瓜堂

印刷所　江川堂
東京市四谷區傳馬町貳丁目